

15
2005. 5

薬友会報

千葉大学薬友会

大学改革の波を迎えて



亥鼻校舎（医薬系総合研究棟）



西千葉校舎



旧校舎屋根飾り

薬友会会長挨拶	2	みのはな山岳会・亥鼻会・サークル紹介	12
副学府長挨拶	2	細谷東一郎先生のご逝去を悼む	13
退官に際して	3	学部だより	13
亥鼻今昔物語	3	受賞・学会賞受賞	13
特集：卒業生の気質と国際ハーモナイゼーション ..	4	博士学位授与一覧	14
研究室紹介	5	教員の異動	15
萩庭さく葉標本データベース	6	薬友会より	15
クラス通信	7	生涯セミナー	16
支部だより	11	編集後記	16

薬友会会長挨拶

山本 恵司



国立大学法人化元年の昨年は薬学部の半数の教員・研究室が亥鼻新校舎に移転し、本学部は2つの校舎に別れたものの学部・大学院の教育研究は極めて順調に進められております。多くの薬友会会員の皆様が懐かしい亥鼻地区を訪ねられ40年以上の変貌ぶりに驚かれた年でもございました。戦後60年を経ましたがいまだ世界では騒乱・天災が相次ぎ、社会では経済は回復せず想定外のM&Aや社会保障制度の危機など混乱のおさまる気配のない状況となっております。薬学教育におきましては、平成18年4月より6年制がスタートいたします。今年度の学部入学者（男子44名・女子39名であり、約50年ぶりに男女比が逆転しております。）が最後の4年制での薬剤師となり、本年度は来るべき6年制の骨格から細部にいたるまでを創り上げる忙しい1年となることでしょう。千葉大学では6年制・4年制を併置とし、定員も同数の2学科設置を計画しております。薬学教育の根幹である薬剤師の養成を1つの柱とし、さらに創薬のあらゆる科学技術を発展させる有為な人材を育成する使命も正面から果たす「二兎を追う」形となりますが、これまでの本学の伝統と実績から千葉薬のアイデンティティーに相応しく、かつ十分実現可能な理念・目標であり、社会の要請に応える最良の方法と考えております。両学科のカリキュラム編成、教員配置、6ヶ月実務実習の具体化、入試方法の見直し等現在鋭意検討を続けており改革の名に恥じない教育システムが設計されつつあります。全教職員が一致団結してこそ大きな発展が期待できることを肝に銘じて改革にあたる所存であります。今後共のご鞭撻よろしくお願い申し上げます。

副学府長挨拶

石川 勉



2005年4月より、学府長から副学府長に変わりますが、引続き医学薬学府薬学系を主として担当することになりました。医学薬学府は、医学部と薬学部が融合して大学院化されたことに伴い、その教育担当部局として誕生したもので、今年で5年目を迎えます。それぞれの歴史やシステムの違いにより、その障壁は大きく中々表には見え難かったのですが、地道にその理念に向かって進んできました。今年度から医学系に医科学専攻修士課程が設置され学生が入学しますので、さらに加速できるものと考えます。一方、薬学部では来年度から6年制がスタートし、大学院教育も見直しが必要となるところですが、千葉大学では既に医学薬学府として先行しておりますので、幸いマイナーチェンジで済むものと思われまます。

薬学部の亥鼻キャンパス移転計画はこれら流れの一環です。既に約半分の研究室はその医療系キャンパスに活動拠点を移し、第一期で完成した快適な新校舎で着実な成果を挙げてきております。残る研究室も早期移転をして真の薬学研究と教育の拠点として羽ばたきたいところですが、国の厳しい予算状況の中第二期工事の見通しは明るいものとは言えません。教育は学生へのサービスでもあり、その環境整備は我々の使命でもあります。この教育・研究に支障をきたす薬学研究院の分裂状態の深刻さを古任新学長や山根事務局長も理解されておりますが、第二期工事の早期実現に向けてさらに声を大にして訴えていきたいと思ひます。そのためには会員の皆様のお力も必要となります。どうぞご協力の程よろしくお願い申し上げます。

私は昭和38年に千葉大学薬学部を卒業後、習志野の腐敗研究所に就職し、以来42年間千葉大学に席を置きこの3月に定年を迎えました。振り返ってみますと昭和34年亥鼻で入学試験を受け、教養課程の2年間は稲毛キャンパス（現小仲台宿舍等）で学びました。亥鼻の薬学部は大正7（1918）年に新営した初代の木造校舎をまだ使っており、1年の歓迎コンパでは先輩の話に必ず出てくる臥豚（がとん）の2階へ、また講義も一度位階段教室で受けた記憶があります。しかし私達が3年になると既に現附属病院のある亥鼻矢作地区の旧医学部基礎教室跡への移転がほぼ完了しており、薬学部2代目の木造校舎で専門の講義や実習が始まりました。私はここで1年間過ごした後卒業実習は習志野にあった腐敗研究所微生物化学部を希望し宮木高明教授・林誠助教授（留学中）・畝本力助手のご指導を受けました。研究室は他にも個性的な先生が多く自由に活気に充ち卒業後もそこに就職しました。腐敗研究所は昭和38（1963）年宮木教授が所長に就任され、新しい研究分野をつぎつぎと開拓し昭和48（1973）年生物活性研究所に改組、4年後念願の新営がかなって習志野から亥鼻の現真菌医学研究センターの建物を新営し移転しました。昭和62（1987）年生物活性研究所は再び改組され薬学系3研究部が薬学部に移ることになりました。

薬学部はすでに昭和41（1966）年2学科制になったのを機に僅か5年で矢作地区から西千葉キャンパスへ新営移転しており、幸い私達も1年後には4号館の新営がかない第2実習室での間借り生活を終え西千葉に落着く事が出来ました。私が西千葉の薬学へ来てから17年目の昨年、薬学部の初代新営の地亥鼻城趾に新築された医薬系総合研究棟第1棟が完成、生物系ということで再び私も移転し亥鼻で退官を迎える事になりました。学生の期間も含むと実に46年、稲毛、習志野、西千葉と3つのキャンパスを渡り歩くとき必ず1度亥鼻に戻ってまた出直す形になり、今度は第2の人生に向けて背中を押されているのかも知れません。24年間の研究所生活は自由にマイペースで没頭出来ました。薬学部に来て初めは慣れない講義や大勢の学生さん相手に実験することに少々戸惑いましたが、今でも一人一人の特徴が目に見え楽しい思い出となっています。第2棟の完成が1日も早い事を願うと共に、皆様の今後のご発展をお祈りしております。

亥鼻今昔物語

元副学長 五十嵐一衛

1966年初夏に薬学部は亥鼻から西千葉へ移転した。当時、亥鼻キャンパスは医学部、病院、薬学部のみであり、それぞれが現在の看護学部、医学部、病院の場所に位置していた。亥鼻の薬学部で学んだ人は職員の中では私のみとなり、この執筆を依頼された。当時は大学紛争もまだ無く、先生方と学生の信頼関係が非常に強かったと思っている。学問に加え、将棋、囲碁、スポーツ、社交ダンスと一緒にやり、“よく学びよく遊べ”の時代であった。学問は講義以外の時でもいろいろ教わり、教わったものは良く身に付いたと思っている。その後、私自身はペンシルバニア大学医学部、大阪大学微生物病研究所、東京大学薬学部と渡り歩き、東京大学から薬学博士の学位をいただき、1971年4月から西千葉キャンパスで職員として勤務することとなった。当時は大学紛争の真つ盛りであり、千葉大学でも数人の死者が出たと記憶している。その結果、形式的には大学の民主化は進んだが、先生方と学生の関係も形式化したように私は感じている。70年代、80年代は日本の経済も順調に成長し、西千葉キャンパスにおける千葉大学薬学部でも大学院の博士課程が設置され、研究人口が増えて世界の一流レベルの研究が可能となった時代であると総括できる。しかし、飽食の時代が進むにつれ、学生の学問に対する意欲の低下も確実に進んできている。2004年4月から薬学部の一部は再び亥鼻キャンパスに移り、医学部、病院、看護学部及び真菌医学研究センターと共にライフサイエンスセンターの一翼を担うことになった。建物は外観も内部も非常に充実したものになった。先生方も大学紛争を知らない人が増えてきており、亥鼻キャンパス移転を機に、先生方と学生さんの信頼関係が昔の亥鼻時代のようなより深いものとなることを切望している。学生さんの心意気があがると研究レベルもアップすることは自明の理である。亥鼻の山から千葉県知事公舎のある穴川方面を望むと、のどかな田園風景が広がっていた40年前と現在の家並みの揃った風景の違いを感じ、個人的な感慨にふけり拙文をしたためた次第である。

特集

卒業生の気質と 国際ハーモナイゼーション



千葉大学薬学部後援会長

厚生労働省大臣官房審議官（医薬担当）

黒川 達夫

昭和48年学卒ですので、はや社会で33年間過ごしていることになります。そのなかで最も長い経験は国際関係と安全性関係で、合計すると20年近く携わっています。医薬品は優れた製品であれば国を問わず求められる商品であり、莫大な開発コストがかかることもあって、

早くから国際的なハーモナイゼーションが製薬産業や行政の大きなテーマになっていました。具体的には、外国で得られた臨床試験データなどが、日本における商品化（国の承認が必要）のために使えるかどうか、などをめぐる議論や検証になります。当初、あまり根拠はないものの、時代劇に出てくるような日本人の集団と、西部劇に出てくる100kgくらいありそうな人たちが、同じ用法や用量で良いわけはないように思われていました。それで日本で今一度日本人向けの試験を試して下さい、という理屈になるのですが、実際に個人の血中濃度の分布データを調べてみたのです。すると、実は個人個人のばらつきが大きく、日本人でも外国人でも4、5倍の違いは当たり前で、モノによっては32倍（ポリモルフィズムによる）もの開きがあること、しかしながら分布の形や中央値などには大きな違いはなさそうだということが分かってきました。人種間の違いを云々するよりは、医療の第一線で患者さま一人一人の個性に注目する方が大切だ、という結果です。はじめて結果を目にしたときには正直驚きました。今でこそ、薬物代謝酵素の多形性という形で教科書にも載っているお話ですが、個人でそこまで違うとは思っていなかったのです。基本は「同じ人間同士」で、個性の与える影響の方が大きいということです。

さて職務から、外国の方々に教えて戴くのと同様に、千葉大ご出身、またそれ以外の大学ご出身の方々に教えるを乞い、育てられてきたわけですが、ここでも国際ハーモナイゼーションと同じように、思いこみを正されるようなことが少なからずありました。巷間、それぞれの校風というのでしょうか、卒業生がおっとりしているとか、颯爽としているとか、聞いてみると何となくそうかな、というようなお話があります。それに私も何となく影響されていたように思います。しかし、一緒に仕事をしたり上司としてお仕えしたりすると、おひとりおひとりの個性の方が、そういったプレジャッジよりはよほど大きいように思われるのです。さて、来春に迫った薬学教育6年制があります。千葉大学薬学部は大変なご努力をされていますが、この6年制も、社会から一層活躍して欲しいという期待に支えられて実現したわけです。また千葉大学薬学部についてみれば、（私自身はどういふ自覚できませんが）これまでも実力に恵まれた、18才人口の中でも最も将来を嘱望される方々が受験され学ばれてきた実績と背景があるのです。ここは一つ、私ども各自の個性に大いに自信を持ち、頑張ってみる手だと改めて思い直しているところです。

さて、とはいうものの、やはりともに机を並べた同窓生や、お教え戴いた先生方から賜った校風というのが、本当に個性の陰に隠れてしまうものかということ、それはやはり事実ではなく、もったいないもののように思うのです。これも国際会合の機会に教えて戴いたのですが、グレート・ワインと言われるものと良いワインの違いは、「あからさまではないが、違いがあり、そのわずかな違いの距離は遠く、そこが命（not obvious, but vital）」とのことでした。確かにそのような態度でワイングラスに臨めば、訴えてくるものの違いがありました。それと同じように、若き日々を互いに影響しあい、また先生方の指導を受けて育つうちに培われる気性は、骨格としての各自の個性の上に、強さや光陰を加えることは間違いないと思います。改めてその目で、私が学んだ頃の千葉大学薬学部を振り返ると、そこは緑あふれ、教授はたうたうとパイプをくゆらし、都会の雑踏を離れた本当にものを考えることにふさわしい場所でした。私自身はそのようなわけで、例えばときおり与えられる木訥なおっとりしているという何とはなしの発射台をむしろ誇りに思い、楽しむようになってきています。またそれは命に関係する仕事に携わる私どもに大切な部分であるのかもしれませんが。千葉大学薬学部および大学院薬学研究院が、亥鼻という、長い伝統の上に築く新しい革袋を得た今日、さらに一層のご発展をとげられることを願ってやみません。

研

究

室

紹

介

生体分析化学研究室



生体分析化学研究室は、昭和25年3月に坂口武一教授が新制千葉大学薬学部に着任され、「薬品分析化学研究室」として開設され、55回目の春を迎えました。その間、数多くの卒業生、修了生が巣立ち、薬に関わる幅広い分野で活躍しています。現在は先代の今成登志男名誉教授の後を受け戸井田敏彦教授、豊田英尚助教授、酒井信夫助手の3名のスタッフと博士前期課程7名、4年生4名、博士研究員1名の総勢15名の構成で研究、教育を行っています。

当研究室のメインテーマである糖鎖は、タンパク質の表面に結合して機能や相互作用を調節するなど、細胞の情報伝達において重要な役割を担うため、「細胞の顔」と表現されています。また、核酸、タンパク質と並んで生命における「第3の鎖」と称され、我が国が常に世界をリードしてきた数少ない研究分野の一つです。タンパク質の大半は糖鎖が結合した形で機能を示すので、糖鎖を詳細に分析しないと生物の仕組みを解明することはできません。その一方で、糖鎖は生体が病原菌などの異物を攻撃する目印となり、ウイルス感染時の免疫応答や臓器移植時の拒絶反応などに関与しています。細胞が癌化すると表面の糖鎖構造が変化することが明らかになり、癌の診断・治療研究においても注目されています。更に発生や分化、老化などあらゆる生命現象に糖鎖が深く関与し、糖鎖分析が多くの疾病の治療法開発に直結する可能性もあります。当研究室では、このような時代の要求を認識して、複合糖質の構造と機能の解明に向け、機器分析技術を最大限に利用し多様な取り組みを進めています。

「何が」、「何処に」、「どれだけ」あるかを明らかにする分析化学の根幹に加えて、「何故」あるのかを考究し、創薬及びQOLの向上に貢献する努力を日々重ねています。6年生への薬学教育課程の改変を目前とし、今後とも当研究室に対する薬友会の皆様の御支援と御協力をお願い申し上げます。

(文責：酒井信夫)

高齢者薬剤学研究室



21世紀の幕開けの年に、私達の「高齢者薬剤学研究室」という「高齢者」の名前のついた研究室が日本の薬学部にも初めて誕生しました。2005年4月現在、教授1名、技術職員1名と学生18名(博士課程4名、修士課程11名、学部学生3名)で構成され、医薬のプロフェッショナルとなるべく、日々研究に切磋琢磨しています。

我が国では、西暦2025年には65歳以上の高齢者は人口の4分の1を占めると予測されており、私たちの研究室は、高齢者を対象とする薬物の適正使用にかかわる新たな専門分野を拓くことを目的に設置されました。医薬分業の進展した現状では、薬剤師が性差医学や老年学を学び高齢者薬剤学を修得することは、医薬品の個性差を考慮した適正使用を強力に推進することにつながります。多数の有能な薬剤師が様々な医療現場で活躍することを国民は期待しており、「高齢者薬学」分野での教育・研究を通じ、このような役割を果たす人材を養成する意義は大きいものです。各診療科の処方箋を調剤する病院薬剤師は、多臓器疾患やADLの低下した高齢患者に総合的判断に基づいた薬物投与設計や服薬指導ができ、また、開局薬剤師においては、高齢化社会の地域医療に薬事衛生をつかさどる専門家として貢献できると考えます。こうした観点から、医療薬学領域の構成研究室である「高齢者薬剤学研究室」では、遺伝子多型と薬物動態に関する研究、性差医療・医学に関する研究、医薬品の適応拡大に関する研究、がん細胞増殖抑制機構に関する研究、和漢薬や医薬品の肝障害作用と免疫機能への影響に関する研究など臨床部門と連携した研究を行っています。

千葉大学大学院薬学研究院・薬友会「卒後教育研修講座」も中心となって開催していますので、ホームページで確認してご参加いただければ幸いです。

(文責：根岸悦子)

萩庭さく葉標本のデータベース

— 国立科学博物館へ寄贈 —

萩庭標本データベース作成協会の会長 福原 正

萩庭さく葉標本については、過去4回にわたり本会報でご紹介するとともにデータベース化のための寄付を要請しましたが、このたびの校舎移転を契機として、萩庭標本が国立科学博物館へ移転されることになりましたので、そのデータベース(DB)も同館に寄贈することにいたしました。DB作成のためにボランティアで協力された方々および浄財を寄付されたみなさまに敬意と感謝を表しつつここにご報告いたします。関係事項の概略はつぎのとおりです。

この標本を作成された故萩庭丈壽名誉教授(生薬学、本学在職1950～82年)は、本学への赴任前から病臥に至るまでの50年間に、北は利尻・礼文から南は沖縄、小笠原の各諸島を含む日本全国に植物採集のための足跡をのこされ、これら地域の自生の顕花植物の約95%を蒐集された。標本の総数は52,283点で、うち薬用植物は1015種、絶滅種および絶滅危惧種は788種である。

萩庭家に保管されていたこれら貴重な標本は、先生の逝去後にご遺族から薬学部へ寄贈され、標本資料室に230箱の茶箱に入れられて保管されていたが、標本の将来にわたる管理・活用のためにはデータベース化が必要との観点から、かつて萩庭先生が顧問をしておられた「ゐのはな山岳会」の会員を中心とした同窓達が結集、8年余にわたりボランティアでDB化の作業が行われ、2002年の薬学会で公開、諸権威をまじえてパネルディスカッションが行われたことは本会報に報告したとおりである。

このたびの校舎の移転に伴い、この膨大な標本の維持管理をいかにするか薬学部教授らが協議の結果、独立法人国立科学博物館(つくば市)へ寄贈することが決定された。同館は日本の全植物標本のセンターで、所蔵する標本は約80万点といわれる。その中に萩庭標本が新たに加えられることになる。そこで本会ではDBを同館に贈与することに決定した。このDBは、同館の専門家からも高く評価され、寄贈されたらこのDBを独立したブロックとして扱うとのことである。

このような次第から、本協会としては、未着手の14箱分(約3,000点)の標本について作業を進め、DBをより完成度の高いものにして同館へ寄贈する予定であり、寄贈をもって本協会は解散することになる。2002年に画像つきで薬学部ホームページ上に公開された「萩庭さく葉標本データベース」(URL: <http://www.sakuyou.p.chiba-u.ac.jp/>)は、寄贈後は同館のサイトへリンクして見ることになる。

なお、本協会の会員はゐのはな山岳会員を中心として90名、作業延べ日数は286日、作業延人員は1381名で、薬友会会員およびご遺族(萩庭家、吉田家)からの寄付金総額は3,103,631円、作業に参加した方々の負担額(交通費、昼食代、宿泊費)は15百万円超となります。最後に、これまで本会活動にご協力くださった会員のみなさま、池上先生、五十嵐前副学長、山本学部長、さらに暖かい応援をしてくださった方々に深甚の謝意を表します。また、完成を見ることなく他界された協会役員・吉田智子、和田泰介両氏のご冥福をお祈りします。

会 計 報 告 (2004年12月11日現在)

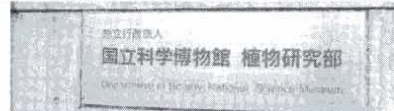
収入: 3,103,631円

内訳: 薬友会会員およびご遺族(萩庭家、吉田家)
(49名)の寄付: 3,100,000円
利子: 3,631円

支出: 1,816,440円(コンピュータおよびサポート品、
標本整理用材料、デジタルカメラ、書籍、学会参加費等、
学外支援者への謝金、交際費、交通通信費、手数料)

残高: 1,287,191円

以 上



▲科博ではこのような標本収納ロッカーを新しく購入して保管され、利用される。

(中村 良輔)

(内田 尚子)

(尾上 好克)

(高橋 哲夫)



(遠藤 純二)

(渡辺 敏子)

(西澤 伸子)

(中村 英雄)



細谷東一郎先生のご逝去を悼む



千葉大学名誉教授 細谷東一郎先生には、平成16年11月2日肺炎のため79歳で永眠されました。まだまだお元気にお過ごしいただけたらと思っていたのに、あまりにも急なご逝去で、痛惜の念にたえません。

細谷先生は、昭和20年仙台の旧制第二高等学校から東北帝国大学医学部に進まりましたが、翌年に東京大学理学部化学科に入学され、ご卒業後ただちに同大学教養学部化学科の助手となられ、32年群馬大学医学部附属内分泌研究施設（38年より内分泌研究所）物理化学部助教授、42年金沢大学薬学部薬品物理化学教授、51年千葉大学薬学部薬品物理化学教授、54年千葉大学大学院薬学研究科生物物理化学教授となられ、平成3年に千葉大学を定年退職されました。

先生のご専門領域は、生物物理化学という研究室名からも分かりますように、深く本質に迫るものであり、薬学部における教育面では難解な物理化学関係の科目を厳しい中にも易しく講義され、一方、研究面では、物理化学的手法を駆使されながら生化学分野での第一線のご研究を活発に進められ、「ペルオキシダーゼの作用機構」、「甲状腺ホルモン生合成と甲状腺疾患」、「リボソームRNA合成に対するステロイドホルモンの制御機構」を中心として、多くの業績を挙げられるとともに、多数の有為の人材を育てられました。先生の数々のご功績にたいし、平成16年12月に瑞宝中綬章ならびに正四位が贈られました。

細谷東一郎先生は大変研究熱心な優しいお人柄の先生でした。先生の輝かしいご功績をたたえ、ご指導を感謝し、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

千葉大学名誉教授 廣瀬 聖雄

学部だより

2004年度 卒業生、修了生の進路

学部卒業 83名：進学64名（千葉大61名，他大学3名），病院・薬局9名，企業1名（中外製薬），公務員2名，など。

修士修了 90名：進学14名（千葉大10名，他大学4名），病院・薬局（公務員を含む）19名，企業40名（大正製薬5名，杏林製薬，第一サントリーファーマ，萬有製薬，中外製薬各3名，ファイザー製薬，三共，田辺製薬各2名など），その他17名。

博士修了 26名：千葉大学，東北大学，横浜市立大学，徳島文理大学，第一製薬，武田薬品工業，塩野義製薬，帝人ファーマ，明治製薬，杏林製薬，日本メジフィジックス，社会教育財団，医薬分子設計研究所 など。

2005年度 薬学部，大学院医学薬学府入学者

学部入学 83名（男44名，女39名）：推薦10名，前期54名，後期19名（出身県別：宮城1名，福島2名，茨城6名，栃木3名，埼玉5名，千葉15名，東京13名，神奈川9名，新潟3名，山梨1名，長野2名，静岡4名，愛知1名，三重1名，京都1名，大阪1名，香川1名，宮崎1名，鹿児島1名）。

修士入学 105名：総合薬品科学86名，医療薬学19名

博士（薬学領域）入学 27名：先進医療科学4名，先端生命科学1名，創薬生命科学21名，環境健康科学1名

○受 賞

平成16年12月4日 財団法人啓明会 生命科学啓明賞 石橋 正己（活性構造化学）

平成17年2月24日 社団法人有機合成化学協会 三井化学研究企画賞 有澤 光弘（薬品合成化学）

第14回 千葉大学大学院薬学研究院・薬友会生涯教育セミナー（宮木高明セミナー）開催のお知らせ

日 時：平成17年7月10日（日）13：00～17：20

会 場：千葉大学 大学ホールけやき会館（1階大ホール）
（〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町1-33）

主 催：千葉大学大学院薬学研究院・千葉大学薬友会

共 催：日本薬剤師研修センター

後 援：猪之鼻奨学会

セミナー参加費（事前予約、当日参加とも2,000円）

（参加者には日本薬剤師研修センターより3単位が認定されます。）



生涯教育セミナー 「アレルギーの基礎知識：ヒトの免疫力」

- 1) 富山 泰 先生（寿製薬株式会社取締役企画室長）
「能動的腫瘍免疫療法の最近の研究より」
- 2) 穂山 浩 先生（国立医薬品食品衛生研究所食品部室長）
「食物アレルギーの主要抗原と検知法について」
- 3) 手島 玲子 先生（国立医薬品食品衛生研究所薬品部室長）
「薬物アレルギーの発症機作と概要について」

宮木高明記念セミナー講演「小児アレルギー疾患治療の実際と今後の方向性」

下条 直樹 先生（千葉大学大学院医学研究院）

17：20～（両セミナー終了後）講師の先生を囲んでの茶話会を予定しております。奮ってご参加ください。

（参加費500円）

場 所：けやき会館3階レセプションホール

＜振込先：郵便振替口座00150-5-551796 千葉大学薬友会＞

ご質問などは戸井田敏彦までお願いいたします。

（生体分析化学研究室 電話 043-290-2894：E-メール toida@p.chiba-u.ac.jp）

生涯教育セミナーへのご招待：本年度は薬学部卒業後35年の1970年（昭和45年）3月、卒業後45年の1960年（昭和35年）3月に卒業された方々をご招待いたします（茶話会参加費につきましては別途徴収させていただきます）。該当されます皆様は、当日受付にてお申し出ください。この機会に是非母校に足を運ばれ、その変貌ぶりをご覧いただくと共に、旧友と久しぶりの一時をお楽しみください。当日お時間がございましたら、亥鼻地区に新設されました新校舎へも足をお運びください。

編集後記

千葉薬の特徴でもあり高い評価を受けてきた総合薬品科学科としての最後の入試が終わり、4月より新入生を迎えました。来春からは薬学教育6年制課程がスタートし、新しいシステムで薬学部の入試が始まります。6年制にむけてのカリキュラムなどの体制作りも着々と進められています。このように急速に進展する状況の中で、薬学部の第二期校舎新営を少しでも早く実現させ、教育・研究環境を整えることは私たちの願いです。大学改革の波を迎えて、薬友会会員の皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。

会報委員

堀江利治（委員長）、濱田康正、石井伊都子、佐藤信範、熊本卓也、有澤光弘、伊藤晃成（旧職員）、小川通孝（S34）、加藤文男（S47）、角田範子（S52）、石川 勉（前委員長：アドバイザー）